騎士様は落ちこぼれ！？

faz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士様は落ちこぼれ！？

【Ｎコード】

Ｎ８２４７Ｔ

【作者名】

ｆａｚ

【あらすじ】

アルヴェスタ大陸のカイン王国で落ちこぼれな少年、エッジ・カーティスが騎士になった。それがすべての物語の始まりとなる（※処女作な上に不定期更新です。設定に無理があったので一回書きなおしました）

プロローグ（前書き）

初投稿です。完結まで持って行きたいと思います。

プロローグ

闘技場で金属と金属のぶつかり合う音が響く。

「……っ！降参だ……」

ここはアルヴェスタ大陸にある国、カイン王国の騎士団専用闘技場。僕は今模擬戦でちょうど負けてしまったところだ。

「残念だったな、エッジ。」

今隣にいる人物は僕の親友レオ・ハーヴェリック。僕との関係は所謂幼馴染というやつだ。彼の容姿は、赤い肩にかかるの髪に、緑色の目、背は１８０台後半、細身だがかなり引き締まった所謂細マッチョだ。しかも新人騎士のなかではトップの実力がある。うらやましい限りだ。

ちなみに彼が口にしたエッジというのは僕のことで、本名はエッジ・カーティス。見た目は銀髪、藍色の眼、背は１６０台前半、小柄なのが悩みだ。

「残念って、……べつにいつものことだよ」

そう、親友はエリートを絵に描いたようなやつなのだが、僕は騎士団の中でも最弱なのだ。模擬戦では勝ったことなど一度もないくらいに。

「でもいつも最後の最後まであきらめないし、その根性は新人騎士の中でも一番じゃないか？」

「実力が伴わないなら意味がないよ」

「褒めてんだから正直に受け取れよ」

褒められているのはうれしいが、せめて一度は模擬戦で勝ってみたいとも思う。

「……ああ、ありがとう。とりあえず今日はもう帰るよ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

騎士団の宿舎の近くの庭で木刀を振りながら考える。相手の攻撃をよけることも防ぐことも思い道理にいかなかった。それに、小柄なのもハンデになってしまう。どうしたものか考えてしまう。

自主練を終えてなんとなく宿舎の掲示板を見る。

「あれ？明日って魔物退治の任務があったんだ？」

これはきずいてなかったら危なかった。説教じゃ済まされなかっただろう。

「それならとりあえず明日の準備しなきゃな」

そのとき僕はまだ知らなかった。その任務が自分の人生の分岐点になるとは……。

プロローグ（後書き）

感想など待っています！！

個人的には猫派です（前書き）

その場のノリでプロローグ以外のサブタイトルを変えました。変更する回数多すぎだろ、とか言わないでください…。自覚してます…。

個人的には猫派です

翌日、僕を含めた騎士団の部隊は王国の近くにあるレムルの森にいた。今回の魔物退治というのはほとんど僕ら新人の腕慣らしのようなものらしい。でも僕は気が小さいのでそれでも怖いとは思っているが。

「エッジ、これはほとんど訓練なんだからもっと気楽に行こうぜ？」

レオもこの任務に来ていたので少し安心する。ちなみに騎士団の偉い人も隠れて来ているとかいう噂もながれている。そんなありえない話を広めたのは誰なのだろうか。別にどうでもいいが。

「レオ、訓練といっても魔物退治だよ？何でそんなに気楽なのさ」

こっちは怖くてしょうがないと言うのに。

「あのなあ、今日やる相手はウルフだぞ？そんなに大きい群れじゃないらしいしボス級もいないだろうしな」

ウルフと言うのは2～3メートルのでかい狼みたいなやつだ。群れを作って行動するのと、群れが大きくなると群れのボスがほかのウルフの2～3倍になるという意味不明な性質をもつ魔物だ。

「でもやっぱり不安なんだよ」

「じゃあエッジが危なくなったら俺が守ってやるよ」

男相手に何言ってるんだこいつ。イケメンがそんなセリフ言うから近くの女性騎士が頬を赤らめてるじゃないか。こっちを凝視しながら鼻息も荒い人（女性）もいるが、気にしたらいけない気がするからほうっておく。

「そんな愛の告白みたいなセリフは彼女ができ時にその彼女に言ってあげなよ」

一応言っておくが僕はノーマルだ。男に「お前が男でも女でも関係ない！！」とか「こんなにかわいい子が女の子のはずがない！！！」とか言われたけど、トラウマになっただけだから。

「ばっ！おまっ、そ、そんなんじゃねーよ！」

はい、アウトオオオオォォォォォォ！！！！！！！！そんな図星さされたような反応するなあああぁぁぁ！！！！！鼻息荒かった人たち（女性）にいたっては大量の鼻血だしてるからあああぁぁぁぁぁ！！！ていうかマジでそっち（・・・）の人じゃないよね！？……親友やめたほうがいいのかなあ。

こんな話をしていたらこっちも緊張はなくなっていた。あの親友（元）はそのためにあんな話の持って行き方をしたのだろうか。というかそうと信じたい。うん、そうにきまってる。

そんな風に少し空気が和んでいたころ、

「ウルフが来たぞ！ってなんだこの数は！？総員早く準備をしろ！！」

魔物が来たみたいだ。その声が聞こえた方を振り向いて僕らは固まった。

「……えっ？」

「おいおい、なんて数だよ……」

確かにウルフはいた。過去のウルフの群れなんか目じゃないくらいに。

「っ、来るぞ！」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

戦況は最悪だった。こっちは騎士になりたての新人、数に怯えてただでさえ不利なのにさらに力が出なくなってしまっている。ちなみに数は１：８くらい。ちなみにこっちは４０人くらい。ひとつの群れで３００越えとか、ありえないだろ！！とか叫びたい。この不利な状況の中、

「ぅおらあっっ！！！」

レオは勇敢に戦っている。僕はと言うと

「うわっ！？あぶなっ！！死ぬ！死ぬ！死ぬってえ！！」

逃げにてっしています。情けないとか言わないで！自覚してるから！！それ以前にただでさえ僕は弱いのに1対3とか無理だから！！

「はあ、はあ、撒いたか。……て、あれ？」

追いかけてきたウルフからは逃げ切れた。うん。代わりに目の前にものすごくでかい狼がいます。……詰んだな。

僕は死にたくないという思いで剣を構える。

「うおおおおぉぉ！！」

僕はボスウルフに切りかかる。

「がるっ」

「あべしっ！？」

普通に吹っ飛ばされました。勝てるわけがない。しかも衝撃で体が動かない。ボスウルフが僕に近ずいてくるのが見える。僕はここで死ぬんだな。じぶんでも驚くほど冷静に頭が働く。その瞬間、

「はあっ！！」

「ぐおうっ！」

ボスウルフが切られた。しかもたてに真っ二つだ。飛び散った血が僕のところまで、飛んでくる。グロイ。そして、狼を真っ二つにした人が視界には言った。年は18くらいだろうか、藍色の髪をポ

ニーテールにして、目の色も同じ色だ。背は僕と同じくらいだろうか、スタイルは触れれば折れてしまいそうなくらい細いのに、出るところはしっかり出ている。要はものすごいその美しさに僕は見惚れてしまう。そこでその女性がこちらへ振り向き声をかけてくる。

「君、大丈夫だったか？」

「えっ？あ、は、はい！助けてくれてありがとうございました！」

仮にも騎士なのに一般人みたいに命を救われるとは、ふがいない。そこでその女性があのボスウルフを一刀両断したことを思い出す。そしたら考える前に口に出てしまっていた。

「あ、あのっ。ぼ、僕を弟子にしてくださいっ！！！」

「……は？」

個人的には猫派です（後書き）

作中でレオがガチのような描写がありますが、レオはノーマルです。エッジは中性的を通り越して完璧な女顔です。女性以上に女らしいし、初見では絶対に女だと勘違いされます。レオが焦ってたのは「見た目でエッジ以上に女っぽいやつは今までみたことないな」とか考えてしまったからです。深い意味はありません。

強くなれそうな気がします。……気がするだけだけど（前書き）

今回は前の話よりも長めです（ちょっと）。もっと1話を長くしていきたいと思っています。

強くなれそうな気がします。……気がするだけだけど

女の人もさすがに助けた相手にいきなり弟子にしてくれなんて思ってなかったみたいだ。まあ、普通そうだよね。

「……キミ、騎士だろ？自力で強くなろうとか思わないの？」

うん、僕は騎士だしそれなりに戦えるだろうとか思ってるんだろうな。

「僕は騎士団で最弱なんです。お願いです！僕を弟子にしてください！！」

こんなことといきなり言っても相手は困るだけだというのは分かっている。だけど僕はだめもとでも頼んでみることにした。

「いきなり言われても困るだけだというのはわかっｔ「いいよ？」

……はい？」

今なんか普通にＯＫされた気がする。空耳かな？

「あの、今なんて……？」

「いや、だからいいよ？弟子」

予想以上に軽くＯＫされた。

「い、いいんですか？」

「うん。もともとこの任務に紛れ込んだのも鍛えがいのある新人を探すためだったし、キミは虐めが……鍛えがいがありそうだからね」

いろいろ聞き捨てならないことを聞いた気がする。とりあえず一番最初に聞かなければならないのは、

「今虐めがいがありそうって言いそうになりました！？冗談ですよね！？冗談って言ってください！！」

え？他に聞くべきことがあるんじゃないかって？こっちの方が僕に実害がありそうだから先に聞いただけだよ？

「先にそっちを聞くのか……。大物なのか？まあいい。それとキミが聞いたそれは幻聴だ。疲れているんじゃないか？」

あっさりと流された。じゃあ次の質問。

「任務に紛れ込んだってどういうことですか？」

「……キミは私のことを本気で知らないのか？」

？何が言いたいのかわからない。有名なのだろうか。少なくとも僕は知らない。

「はい」

なんか少し寂しそうな目でこっちを見てくる

「騎士団では私の事を知らない者はいないと思っていたんだがな

……」

「で、実際なんで有名なんですか？僕は知らないけど」

「最後の一言が無性に腹立つがまあいい。教えてやろう。私はカイン王国騎士団近衛隊隊長、ミア・ミレイだ！！」

「へー、近衛隊隊長……って、え！？マジですか！？僕そんなすごい人に弟子入りしちゃったんですか！？」

なんかすごい人だろうとはおもっていたが、予想以上にえらい人でした。ちなみに、カイン王国では騎士団を大雑把に分けると一般騎士団と近衛隊に分かれる。任される仕事もまったく別だ。その二つを束ねるのが騎士団長である。近衛隊は一般騎士団よりも人数が少ない分実力は格段に上だという。つまり目の前にいるこの人は騎士団の中で二番目に強いということだ。

「ふっふっふ、これで私のすごさが分かっただろう」

「はい……正直信じられないです」

そんな風に唖然としているとミアさんに、

「そういえばキミは今日任務があったから明日は休みだろう？明日から修行をはじめたいと思うのだがそれでいいか？」

そういわれて、僕もすごい人に教わるのだから少しは強くなれるだろうと期待してしまう。

「はい！よろしくお願いします！師匠！」

「師匠はむず痒くなるからやめてくれ。私のことはミアでいい」

苦笑しながら僕にそういってきた。ならミアさんと呼ぶことにしよう。

「そういえばキミの名前を訊いてなかったな。名前はなんていうんだ？」

そういえば自分の名前を言ってなかった気がする。

「僕はエッジ・カーティスって言います。あらためてこれからよろしくお願いします、ミアさん！」

僕は満面の笑みで言う。

「そ、そうか。ではこれからよろしく、エッジ」

なんかミアさんの顔が赤い。どうしたのだろう。

「話は変わるが、キミはまだ任務の途中だろう？そろそろ集合だと思うが、行かないのか？」

え？任務……？

「え？ああ！！忘れてた！！急がないと！じゃあミアさん、あしたからよろしくお願いしますね！」

僕はダッシュで集合場所に向かった。後ろから「明日は朝８時に訓練場だからな～」とか聞こえた気がするが気にしてる余裕が無か

ったので聞き流して走った。

＋＋＋

結果を言えば間に合わなかった。

「エッジ・カーティス！遅いぞ！！」

「すいませんでした！」

いまは遅れたので説教されています。

「まあいい。とりあえず今回は想定外の出来事も起こったが、一人の死人も出ずに終えることができたことをうれしく思う！今後ほかの任務でも想定外の事態も起こるだろうが………」

隊長のセリフは長い上につまらないので気にせず今日のことを思い出していた。そうしていると隣にいたレオが小声で話しかけてくる。

「おい、エッジ。なんか妙にうれしそうだが何かあったのか？」

「レオ。それがさ……」

レオに今日の出来事を話した。

「はあ！？あのミア・ミレイに弟子入りしたぁ！？」

案の定レオはすごく驚いていた。叫んでるように見えるがそれでもレオは小声だ。

「これで僕も騎士団最弱とか言われないくらいに強くなりたいな」

「くっ、うらやまし過ぎる。なあエッジ、俺も鍛えてくれないかミレイ隊長に聞いてみてくれないか？」

「聞くだけ訊いてみるけど……」

頼まれるとなんだかんだで断れない。

「ありがとうエッジ、礼はきっとするぜ」

「別に、お礼なんていらないよ」

訊くだけなのにお礼なんてされても逆にこっちが申し訳ないし。

まあ、こんな感じで僕の初任務は終わったのだった。しかしまさか次の日に僕の天敵と出会うことになるとは思ってもいなかった……

強くなれそうな気がします。……気がするだけだけど（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございました。次話で新キャラを出す予定です。

走るのが嫌いになりそうです（前書き）

すいません、投稿に間が空いてしまいました。その割に短い駄文です。それでも読んで下さるとうれしいです。

走るのが嫌いになりそうです

次の日になりました。
僕は何時に行けばいいのか聞いてなかった。今は目が覚めたばかりだが、時計を見たら8時半だ。とりあえず広場に行ってみよう。

、、、移動中、、、

「遅い！！！」

ついた瞬間に怒られました。

「ご、ごめんなさい」

正直に誤ったが、ミアさんの怒りはさめないようだ。

「私はちゃんと8時集合だといったはずなんだが？」

ああ、30分待ったなら怒るのも当然か。僕がお願いしたわけだし。

「朝っぱらからここで1時間待たされた私の身にもなってみろ、まったく」

……え？1時間？

「あの、ミアさん。8時からなのにその30分前から待っててくれたんですか？」

「……あ」

ミアさんが固まった。

「ちっ、違う！それはそう、えっと、その、あれだ！ただ待たせるのも悪いだろうと思って先に来ていただけだ！別に始めての弟子に浮かれてたわけじゃないからな！」

盛大に自爆してくれました。どうしよう、この人かわいい。

「まあ、この話はここまでにして修行しましょう。」

とりあえず話題をかえてあげた方がいいようだ。

「あっ、ああ、そうだな……って何で遅刻したキミが上から言うんだ？」

バレタ。

「気のせいです」

ものすごく笑顔で返してみる。ミアさんは少し顔が赤い。１時間外で待ってたから冷えたのかな？

「あ、そうだ。話は変わりますけど、僕の友達、レオっていうんですけどそいつもミアさんに鍛えてほしいっていってるんですが、どうです？」

本気で忘れていた。これを言い忘れていたらレオがしつこく文句言ってくるだろうな。あいつ粘着質だし。

「レオ？ああ、新人で一番優秀だとかいうやつか。うーん、あいつも虐めがいがありそうだったな。いいぞ」

「ついに虐めがいって言っちゃいましたね。レオのことについてはありがとうございます。レオには僕から言っておきますね」

この人はＳなんだな。弟子を選ぶ基準がそれとか、僕は一番虐めがいがありそうなのかな……。

「ああ、ではそろそろ訓練に入るか。誰かさん（・・・・）のせいで時間がないからな」

「……ごめんなさい」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「では、少し遅れたが訓練をはじめよう」

「はい。よろしくおねがいします！」

少し遅くなったが訓練が始まりました。

「ところでキミが使っている武器は何だ？」

「騎士団に入隊したときに支給された騎士剣です」

あまり金があるわけでもないしそのまま使っている。

「そうか、よくみたいから少し貸してくれないか？」

「？いいですよ。はい」

ミアさんに剣を渡す。支給品だし珍しくもないと思うけどなんだろう？

「ありがとう。ふむ、そうか……。うむ」

ミアさんは剣を見てしきりに頷いている。何か分かったのかな？

「……ふむ。えいっ！」

……は？

「……ミアさん。僕は何か幻覚が見えているようです。今何をしたのか教えてくれませんか？」

「キミの剣を折っただけだが？」

「やっぱりそうなんですか！？何で折るんですか！？それ以前に何でそんな軽いノリで折れるんですか！剣ですよ！？」

ちなみにミアさんが折った剣は俗に言うブロードソードに近いものだ。それを両手だけでへし折ったのだ。この人は化け物か？掛け声はかわいかったけど……。でもそれ以前に支給品だから折ったりしたら報告書アンド説教地獄だ。……おっといけない。僕もかなりテンパっているみたいだ。

「うむ、まずいうがうちの騎士団の剣は大きいほうだからな。キミみたいな小柄な人間には向いていないんだ。何で身の丈に合わない武器を使おうとする？死にたいのか？」

珍しくミアさんがまじめにしゃべる。……いつもがあれだから忘れてたけどこの人って戦いに関してはすごい人だったっけ。少し……いや、かなり見直した。

「ちなみに剣を折ったのはノリだ」

前言撤回です。

「じゃあ折らないでくださいよ！それ支給品なんですよ！？怒られるのは僕なんですからね！」

「剣を折ったのは私の方から上に言っておく。さすがに不憫だからな」

この人にも優しさがすこしのこっていたみたいだ。

「で、話しは戻るが、キミは身のこなしや反応は悪くなかったからな。もっと小回りのきく武器がむいていると思うぞ」

「そうなんですか？って僕の戦いはいつ見たんですか？」

ミアさんの前で戦ったことなんて無いはずだけど……

「レムルの森で見させてもらったぞ」

「あの時ですか。って見てたんならピンチになる前に助けてくださいよ！」

「まあ、過ぎたことはどうでもいいのだが、そんなわけでな。いろいろ武器をためさせてやりたかったのだが準備を忘れていてな、すまない。だから今日は違うことをやりたいと思う」

「何をするんですか？」

「体力を見るのと、体力をつける」

普通に基礎トレーニングってことかな？

「つまりどうしろと？」

「走って来い」

「どこまでですか？」

走るだけならそこまでつらいこともないだろう。

「倒れるまでだ」

……WHAT？

「ア、アハハ……冗談ですよね？」

「本気だ。ほら、いって来い！」

「ミアさんの鬼ーーーーーーーーーーーー！！！」

こうして追われるように走らされた僕は2時間倒れるまでずっと走らされたのだった。

走るのが嫌いになりそうです（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました！新キャラを出すとか言っておきながら出せなくてすみませんでした！（ジャンピング土下座）次こそ出しますので！

……感想とか送ってくださるとうれしいです。ジャンジャンおくってください。

武器決めるのに時間かかりすぎじゃない？（前書き）

更新が一ヶ月以上空いて本当申し訳ありませんでした！！その場のノリで書いているので続きがまったく思いつきませんでした。次からはもっと頑張ります。

武器決めるのに時間かかりすぎじゃない？

死ぬかと思いました。

「……もう…ハアッ……走りたくっ……ないっ……ですっ」

「思ったよりもったな。とりあえず今日はもう走らなくてもいいぞ」

まだ走れっていわれたら絶対に逃げてたな……

「逃がさないぞ？」

「勝手に人の心読まないでくださいっ！」

「まあ、そんなことはどうでもいい。じゃあ次は君に合う武器を選ぼうか」

「え？武器はもってくるのを忘れたっていってませんでしたか？」

「2時間もあったんだから持ってきたに決まっているだろう？」

ミアさんが「何を言ってるんだこいつ？」というような目で見てくる。そういえばミアさんは2時間ヒマだったんだよね。

「それもそうですね。じゃあどの武器から試すんですか？」

こっちも自分に合う武器なら強くなれる気がするのでけっこうワクワクしてたりする。

「まあ、焦るな。まずはこれを試してみようか。キミに合いそうな気がするし」

そういってミアさんは僕に2本の武器を渡してきた。とりあえず受け取ってみる。

……アレ？

「あの……ミアさん？」

「どうかしたか？」

「この武器は何ですか？」

「モーニングスターだがそれがどうかしたか？それより早く使ってみろ」

「なんで僕に合いそうな武器がモーニングスター二刀流なんですか！？騎士剣でも重いのにコレの二刀流とか無理ですよ！！そして何より僕にどんなイメージを持ってるんですか！？」

しかもコレかなり使い込まれてるし、持ってたら呪われそうです。

「エッジ君、考えてみろ。キミがソレを使って、且つ満面の笑みで、戦場のど真ん中で敵をなぎ払っている姿を」

……想像してみた。……うん、軽くホラーだ。

「想像したけどそれがどうかしたんですか？」

「……いいと思わないか？」

「思いませんよ！？ただ怖いだけですから！」

ミアさんの感性がおかしいと思うのは僕だけじゃないはずだ。

「そうか、キミにはまだ早すぎたか……」

「いや、そういう問題じゃないと思います」

ミアさんがおかしいだけです。

「まあ、さすがにモーニングスター二刀流は冗談だがな」

「感性が以上なのは素だったんですね……」

武器も本気で言ってたのなら弟子入りを後悔しているところだ。

「わ、私の感性のどこが以上なんだ！？私の感性は普通だ！みんなが以上なんだ！！」

「完全に変わってる人の発言ですよ！？」

「う、うるさいな……。っと、また話がそれるところだったな。ちなみに私は、キミはいざと言うときは知り合いだろうがお構いなく殴れる娘だと思っている。さあ、こっちが君に合うと思った武器だ」

「話を戻しつつもさりげなく大きな爆弾を落として行ってくれましたね。そして「こ」のニュアンスが何か違う気がするんですが？」

どうして僕はそんなイメージを持たれてるんだろう？

「いいからこの武器を受け取るんだ」

「あ、すいません」

ミアさんに言われて僕は武器を受け取った。今度はまともみたいだ。

「って、これ短剣ですか。さっきのモーニングスターといいこの短剣といいミアさんは二刀流に何かこだわりでもあるんですか？」

「うるさいぞ、これにはちゃんと意味がある。短剣は剣より軽いからキミでも片手で持てるだろう？代わりに一撃の威力が剣より小さいからその分手数で補うんだ。ちゃんと意味があるだろう？」

「疑ってすいませんでした」

この人忘れたころにまともな発言するな。いつもまともだったらいいのに……

「なんだと？」

「何で聞こえてるんですか！？」

僕にプライバシーは無いのかっ！？

「無いな」

「答えないでくださいっ！！」

「そんなことはどうでもいい」

「ひどいっ！」

僕はどうでもよくないです……

「ほら、はやく武器を使ってみろ」

「うぅ……やりますよ」

これ以上この話に食いついても無理みたいなのであきらめて短剣を振る。

「……あれ？本当にしっくりくる……」

「当たり前だ。私は戦闘のプロだぞ？短剣の中でも君に合いそうなものを選んできたしな。その中で特に使いやすいのを選ぶといい」

「はい！」

＊＊＊＊＊＊三十分後＊＊＊＊＊＊

「これとこれが使いやすかったです」

全種類試して見た結果、二種類まで絞った。ひとつは少し大きめで重量もある短剣。もうひとつはもう片方より少し刀身が短く、軽めの短剣。どちらも使いやすいのでかなり迷う。

「ふむ……いっそ片方ずつ持ったらどうだ？そうすれば戦闘も幅が広がるし。なかなかいい組み合わせだと思うぞ？」

片方ずつ持つ……その手があったか。きずかなかった。

「はい！じゃあそうします！」

こうして僕の武器は決まったのでした。

武器決めるのに時間かかりすぎじゃない？（後書き）

作「はい！では今回から主人公と作者の会話があとがきに入ることになりました！ワーワーパチパチっ！」

エッジ（以下エ）「本当にいきなりすぎるけどなんでこんな企画を始めようとおもったの？」

作「あとがきで何書けばいいかわからなかったから。こうゆうの書けば埋まるし」

エ「ところで前の話で新キャラを出すとか書いてたのにまたでなかったね」

作「うっ、どんなキャラを出すかは決めてるんだが出すタイミングが分からなくなったと言うか……えっと……では、プロフィールコーナー！！今回は主人公のエッジ君です！」

エ「話しそらしやがった！？しかも話そらすの下手すぎるでしょ！」

作「ではスタート！」

エ「こんな作者で大丈夫かな、この小説……」

エッジ・カーティス

性別　男の娘

年齢１６
身長　１６２，０
体重５２ｋｇ
武器　短剣二刀流
髪　銀
目　藍色

非力だけど根性は一級品な子。男のはずなのだがそこらの女の人より綺麗。今のところ唯一のツッコミ。瞬発力に定評がある。女に見えることを嫌がっているが趣味、特技は料理な上に家事もすべてできるという良妻予備軍。笑顔は男女問わず虜にする。嫁にしたい女性騎士新人騎士部門ではダントツの一位だったが本人は知らない。幼馴染はレオのほかにもう一人いたが二人とも初対面のときはエッジを女だと思っていた。

作「ちなみにエッジは騎士団の宿舎の共同風呂をほかの男性騎士の強い希望で使用禁止にされたから専用風呂が用意されるというエピソードがあったりする」

エ「うん、僕は立派な男だというのにみんな失礼だよね」

作「……え？」

エ「いくら作者でも殴るよ？」

作「さあ、今回はここまで！ここまで読んでくださってありがとうございました！次話では今度こそ新キャラを出します！……出るといいなぁ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8247t/

騎士様は落ちこぼれ！？

2011年8月6日13時45分発行